
naruto **地輪眼を持つ転生者**

シリウス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

naruto 地輪眼を持つ転生者

【Nコード】

N60140

【作者名】

シリウス

【あらすじ】

ある女の子が神たちと死者がいる世界へ来た。彼女は冥王・神・魔王から地輪眼・才能・10尾をもらった。そして彼女はナルトの世界へ転生。さてさてナルトたちはどうなるのか（原作崩壊・主人公ほぼ最強です嫌いな方・嫌な方はすぐに引き返してください

第1話

「んっ」

気がついたらここにいた・・・

そこにはたくさんの人が一つの円に向かって並んでいた

その人たちは目が死んでいた

よくわからないが目が死んでいるのだ

その列の人にははなしかけるのはちょっと躊躇したので並んでいない人を探した

5分ぐらい探すと3人の人が話していた

「あの・・・」

私は思いきって話しかけてみた

「「「!」「」」

なんかわからないけどおどろかられた

落ち込むかも・・・

「あっあのなんか変でしょうが」

「おどろいた自我まで持っているとは」

「てかこのこあの人の・・・」

「「「「・・・」」」」

しかもスルーまでされた・・・

「おい」

「あっはい」

「お前は どうしたい？」

どうしたい？意味がわからない

「はい…？どうしたいってどういうことですか」

「そのまんまの意味ですよあなたはその後どうしたいですか」

「元の世界に戻し「すいませんが無理です」て

「どうしてですか！」

「だって輪廻の輪を外れてしまいましたし・・・」

「ハア」

なんかお約束っぽい感じ・・・

「あつじやあこの子のために世界作ってあげれば？」

「ふむそれでもいいが始めてだぞ1人のために作るってのは」

「まあいいじゃないか自我を持ってここにいるっていうのも始めてなんだし」

「あのあなたたちは誰なんですか？」

さつきからずっと気になっていることを聞いてみた

「僕は冥王」

「俺は神」

「わしは魔王」

なんかすごい偉い人みたいなんだけど・・・

威厳がないって言うか

「まあそんなに固くならなくてもよい」

固くなってるかなあ？

まあ気にしなくていいか

「それでどんな世界がいいんだ」

「あつナルトの世界がいい」

一回行って見たかったんだよね〜

「ナルト？ちょっと頭の中を読ませてね」

「別にいいっつ………」

う〜気持ち悪い頭の中読まれるのがこんなに気持ち悪いなんて

「わかったでは」

ピカッ

まぶし〜

「さあ出来た」

「でもこのままじゃすぐに死ぬよね〜」

ははそのとおりだね

「まあそれぞれで才能やら能力やらあげればいいだろ」

「そうするか」

「じゃあ僕からね〜ぼうだいなチャクラと

失明することのない地輪眼あげるよ」

「地輪眼？」

そんなの漫画にはでてこなかったけど

「ん〜とね写輪眼と輪廻眼の両方の能力を持った目と言えればいいかな

写輪眼でみきったりコピーができるし忍術とかだったら輪廻眼で完璧に使えるよ

しかも地輪眼だから血塊限界もコピーできるし使うことができるよ〜」

うわー最強じゃん

「おまえそれやったら俺たちあげる物がほとんどないじゃないか」

「まあいいじゃん」

「ハア・・・じゃあわしからは努力をすればどんなことでもかいく出来る才能をやるっ」

「んーじゃあ俺からは10尾をやるっ」

「10尾?」

「ああ俺が作った世界では尾獣は10尾の力の1部から生まれたということにしたから」

「みなさんありがとうございます」

「じゃあ行ってらっしやい」

主人公 設定説明

ほぼネタばれです嫌な人はあとでお読みください

紫姫（うちは） ルナ

容姿 髪は白髪に淡い銀と金がところどころに混ざっている

目の色は深紅っぽい赤

写輪眼だけを使うと赤から黒に眼の色が変わり

輪廻眼だけを使うと赤から白の何重もの円の目になる

10尾と尾獣化すると人型だと髪が白銀に変わり

目の色が金に代わる

能力 地輪眼（写輪眼・輪廻眼

写輪眼だけ輪廻眼だけでも使える

地輪眼で使うと血塊限界までもが使いこなせる

地輪眼を使ってもコピーは一応できるが

精度が低くなる

10尾 1尾から9尾は自分の能力の1部から生まれた

なので1尾から9尾までの能力を使える

ルナのが気に入ったので力を貸している

第2話

「うあー」

あれこのしゃべり方・・・

あーこの転生は赤ちゃんから始めるんですか

まあこっちも面白そうだけど・・・

今はいつなのか知らないといけないよね

「男の子？女の子？どっちこぼっほ」

「女の子だ」

この人うちのは代表じゃなかったっけ・・・

確かサスケとイタチの父親

「そうじゃあ名前はルナ紫姫　ルナあの人と一緒に考えた名前こぼっほ」

あの人ってことはうちのは代表は私の父親じゃないのね

それにこの人ぐわいが悪そう・・・大丈夫かな

それにきつとこの人がお母さんなんだろうな

「うほほ私はもう終わりが近いわお願いその子はうちはとして育てないで」

「！！わかった」

「よろしくね」

ピーーーーーーーーーーーー

えっどついうこと

「済まない私はもうお前の面倒を見れない

「元気でやるんだぞ」

「あーあ」

そう言って代表サンは行ってしまった

私をどこかの家に置いて

んーどつしようかな

きつとこの眼を持っていたら狙われるんだろつなー

どうせ原作とか変えたいと思っているし修行をしょ

どうせだれも面倒見てくれなさーなふいんきだし

でもその前に10尾にあいさつしとじつと

そう言って私は精神世界に入った

へー想像していたのと違うナルトの精神世界はいやな感じだったから
みんなそんなもんかと思っていただけと違うんだね・・・

ちなみに私の精神世界は草原でした

「ん〜それにしても10尾ってどこにいるんだろ」

『我を呼んだか』

声が出たほうを向くと1人の女の人があっただけでいました

「もしかして10尾？」

『いかにも我になんのようなかな』

「あっいえ大したことじゃないんですけど

せっかく一緒にいるんでとりあえず挨拶をっと思っただんですけど」

『ふむ礼儀正しい子じゃな』

「あ〜もしよかったですら名前教えてもらえませんか？」

『名前とな？』

「はいいつまでも10尾と呼ぶのは失礼かと・・・」

『気に入った我の名前はフウじゃよろしゅうの』

「はい」

『力を貸してほしい時は呼ぶがいいいつでも力になるぞ』

「ありがとうございます」

いいふいんきの人？だったな

さて戻るか

さて原作に介入するにも今が原作何年前か知らないといけないよね

そのためには赤ちゃんが町を歩いていると変だから

変化をしなければいけないよね・・・

んゝまあ実際にやってみるか

『変化の術』

ボン

「やったできた」

それにしてもおなかすいた・・・

『ねえフウこの辺になんか食べれそうなのいないかな』

おなか減っちゃった』

『そうかならば我がとってこよう』

『ごめんね』

『別にいい』

そういつてから5分ほどでフウは帰ってきた

手にはクマを持って

ははフウすごすぎ

「てかフウって私の外に出れたんだね」

「ああ主が望んだならばな」

「ねえフウって体術とか忍術とかって使えるの？」

「ああ我が使えるのは体術・忍術・神術・仙術・幻術じゃな」

「へーじゃあフウに稽古付けてほしいんだけど」

そう私は体術とかが全く使えないのだ

「わかった」

「ありがとうフウ」

さてまず家の外を見て回って原作何年目かを知らないかね

あーそれにしても私ってうちはに嫌われているのかな

なぜかって家の場所だ

私の家の場所がすっごいはじっこにあるし

生まれてから3日ほどたったけど誰も家に訪ねてこない

フウがいなかったら死んでたな餓死で

たぶんこの眼だろうな・・・

私の目は生まれてからすぐに開眼していたからな

行きすぎた天才は恐れられる ってね

まあ私としてはどっちでもいいんだけど

まあいろいろ聞いて回ったり最近起きた出来事を聞いて回った限り
だと

今は原作の6年前ってことがわかったよ

んゝ1年は修行してそれからアカデミーはいろっかな

火影に言えば何とかしてくれるだろう

今度火影に会いにいったこ

第3話

フウの修行を始めてから1週間が過ぎた

いや〜フウの修行は容赦ないわ

修行してって言った私が言うのもなんだけど・・・

まあ朝の散歩は息抜きってことで

ん〜やっぱ朝って気持ちいいわ

んっ？なにこいつきもい・・・

手にはおかつぱ頭の女の子ああ

そついやこの時期だっけヒナタの誘拐

まあヒザシさん殺しちゃうのはかわいそうだから助けてあげよっかな

ちょうど出会ったし

ヒュッ ドン

あはは・・・

てか雲隠れの忍者

写輪眼使ったからってこんなに簡単にやられていいの？

「ヒナター!!」

あっやっつとヒアシさん来た

「君は・・・?」

「あつ別に名乗るほどのもんじゃないんで」

ではさようなら

ひゅっ

「あの子はいつたい」

「ただいまー」

「ルナおかえり」

「うんフウおなか減ったよ」

「そうかご飯はできてるぞ」

んーいいにおい

「ありがとー」

ヒアシが悩んでいたころ当の本人は気楽なものであった

あつそうだそろそろ火影様にあいさつに行こうと思ってんだよね
もういっておくか

「フウ火影様の所に行ってくるね」

「わかった行ってくるがよい」

「うん」

ガラッ

「！」

「こんにちはー」

「何のようじじゃ」

「いえ別にあいさつに來ただけです」

「お主どこの里のものじゃ？」

うわひどい……

「いやですねこの里のものですよ」

「お主のようなもの……」

あつそうか変化してるの忘れてた……

「あつすいません変化してますんでそれとききますね」

ボンッ

「なんと」

『変化の術』

「ふうわかってくれましたか？」

「まさか1歳にも満たない子とは」

「まあいいじゃないですか」

私にはどうでもいいことですし

「それで何のようじゃ」

「あいさつと来年アカデミーに入れてほしいんですが」

「なぬ！まあいいだろうそなたであれば7年もすれば卒業できるじやろっつ」

ははおどろきすぎでしょ

でも・・・」

「それじゃあ遅いんです」

「では何年と」

「5年です」

「ハアわかったでワシになにをしろと」

物分かりがいいですねこれだから火影様は好きです

「アカデミー入学と5年でアカデミー卒業できるようにしてください」

ちょっと殺気を混ぜていったら

「わかったしようがないじゃろう

ワシ殺されたくないし」

だって

「ははこうするのが一番早いと思って

まあありがとうございます」

ガラッ

来たときどうよう窓から出た

さてと1つかたずいた

次はうちは一族襲撃事件ですね

たぶんそれが起こるのは今日でしょう・・・

ドン

「こんにちはイタチさんもう終わったんですか？」

ドアからちゃんと入ってくるなんて偉いですね

「！？お前知っていたのか・・・」

「はい私も殺します？」

「いや今の俺には無理だろう」

ありゃ？せっかく強い人と戦えるかと思ったのにな

「ふふでは何のようでしたか？」

「おまえが変化ができるとは知らなかったんだな」

まあ教えていませんしね

「わかりましたではさようなら」

「ああ1回戦ってみたかったな」

「また今度・・・」

ガラッ

今度もドアからとは優等生すぎます。イタチさん

『ねえフウ今の私とイタチさんどっちが強いかな』

『ルナですねイタチはその辺をよく理解してます』

『ルナがほめるなんて珍しい』

『ほんとのことと言っただけですよ』

第4話

それから約6年の時が過ぎ

「あいつ6歳で卒業したらしいぜ」

「あああいつは親なしぼいぜ」

あーうるさいな

いいたいことがあるなら私に直接言えばいいのに

それに私にはフウがいたから親がいなくてもいいのに

ぎゃーぎゃー

はああつちはあつちでうるさい

きっと原作通りサスケとナルトがキスしたくらいでしょうが

ガラッ

あつやつとイルカ先生来た

イルカ先生は私のこと認めてくれた先生で

なかなかいない好きな上忍の一人だ

「スリーマンセル 今後は3人1組の班を作り……」

各班ごと1人の上忍が付きその先生のご指導のもと

任務をこなすことになる

班は力のバランスが均等になるようにこつちで組んだ」

まあそうでしょうね

「・・・7班春野サクラ うずまきナルト ちはサスケ」

「なんで・・・」

あーもういちいちうるさいな

マンガじゃ面白いと思ったけど実際に付き合つとめんどくさいやつ
ですね

でもここは原作通りか

「次8班紫姫 ルナ

この班は人数の都合によって1人とする」

ふふよくわかってますね

私と同じ班になると死んでしまう可能性が増えますしね

きっと火影様が根まわししてくれたんでしょう

「でも先生1人で大丈夫なんですか？」

「彼女は6歳でアカデミー卒業したんだ1人でも大丈夫だろう」

チツ

あつ誰か舌打ちした

方向からしてうちはサスケかな・・・

まああいつは3人1組は足手まといが増えるって思っている奴だからしょうがないのかな

「それにもしもの時は7班と一緒に行動することになるから大丈夫だ」

そうなんですか・・・

「次第9班日向ひなた 犬塚キバ 油女シノ

第10班奈良シカマル 秋道チヨウジ 山中いの」

ふんここも原作と一緒にまあ今までは大したことしてこなかったしね

「カカシ先輩何で俺もなんですか」

「しょうがないでしょ」

「写輪眼もっているんですから先輩とこで」

「だから一応合同でやることもあるってことよ……」

「全部先輩がやってくださいよ」

「それにぶっちゃけもう写輪眼コントロールできてるから俺必要ないしね」

「なら特別上忍でいいじゃないですか歳年少上忍」

「だめだってじゃあ予定どつりナルトとルナの家を回るよ」

「はい……」

「ひっ」

「まいったな」

「なんでクマが……」

ただいまカカシ達はルナの家に来ていた

そして冷蔵庫を開けるとそこにはどでかいクマがいた

「ルナは生まれてすぐここに放置されたのじゃ

生きるために自分で身につけたのじゃろっ」

本当はフウがとってきてるのだが

「本当に上忍じゃだめですか」

「だめだ」

「ハア」

「じゃあ次はナルトの家だな・・・」

そのころ

「ちょっと何やってんのナルト」

「ニシシシ」

遅れてくる方が悪いんだってばよ」

あっあの人たち人の家に勝手に入りやがって

たぶんあの人たちが担当上忍か・・・なら

「ナルト」

「んっ？なんだってばよ」

「やっぱやめた方がいいですよね（ちつつまんねーの）」

「いや逆よそれじゃ足りない」

さてどんなの仕掛けてやろうかな

「「えっ」「」

『ルナ・・・』

『だってフウ。ムカつくじゃない人の家勝手に入って』

『その通りじゃさあどんどん仕掛けてしまおう』

『ええそうね』

そう言つて5分後仕掛け終わった

「ひっひどいわね」

「あらそうかな」

ガラッ

ポフツバンツ「うおっ」シュズザザバツシャーーン

「せんぱ」バシャ「えっ」ボンドサツバフバツシャーーン

カカシが教室に入ってくると上から黒板消しが落ち黒板消しについた起爆札が爆発

それに連動しくないが向かってきてよけた所に大量の水

その下次の人が教室に入ってくるとセンサーが発動しバケツの水が落ちてくる

バケツに着いた起爆札が爆発それにチョークの粉が入った袋が落ちてきて頭に直撃

最後にカカシと同じく大量の水

「私の家に勝手に入った罰です・・・」

「「!!」」

「んーお前らの第一印象は大嫌いだ!!」

「はは」

ありゃ？嫌いが大嫌いに変わってる

まあ大丈夫でしょ

「じゃあまず自己紹介から」

「まず先生のことを紹介してください」

カカシは知ってるけどもう一人の人って誰なんだろ

「そうねなんかあやしいわ」

「俺の名前ははたけカカシだ好き嫌いはお前らに教えるつもりはない
将来の夢って言うてもな・・・まあ趣味はいろいろだ担当は7班
だ」

「僕はいちがお ユウ好き嫌いは特にないかな

将来の夢って言うてもね趣味も今は特にないかな担当は8班だよ」

ユウね・・・原作にはでてこなかった人だな

「ねえ結局わかったのは名前だけじゃない」

サクラがナルトとサスケに同意を求めている

「じゃあそつち右から」

「俺さ俺さ名前はうずまきナルト好きなものは・・・」

まあながいので省略させてもらいます

「私の名前は紫姫 ルナ好き嫌いは特にないですね

将来の夢もそうですね、趣味は鍛錬と道具作りですかね

ちなみにさっきの起爆札も私のでづくりですよ」

普通の起爆札の威力の5倍ですからね・・・

「どつりで威力が強いと思っただよな」

「まあ私の家に勝手に入った罰ですよ」

まだ怒りが収まりませんけどね

「そこなんだよななんで知ってる」

「私の家にはいろんなものがあるのでちょっとしたを結果はっていいんですよ……」

「まあとりあえず明日はこの5人で演習するぞ」

「なんで演習やるのよ演習なら学校でさんざんやったわよ」

「ただの演習じゃないククク」

「なんだってばよ」

「いやこれ言ったらお前ら完璧に引くから」

「カカシ先輩ちょっと怖いですよ」

「引く？」

「ああ卒業生28人中下人と認められるのはたったの10人

残りの18人はアカデミーに戻される

この演習は脱落率は66%以上の超難関テストだ」

「……………」

早く帰りたい……

「あれ紫姫引かないのな」

「だってあなたたちに負けるとは思ってもいませんもん」

「……………(まあ的を得てるな)」

「じゃあ詳しいことはプリントに乗ってるから

明日遅れてこないように」

あなたに言いたいですよ……

いってもどうせ遅れてくるんじゃないけど……

さあ明日が楽しみです

第4話（後書き）

今回は駄文になってしまいました

なおすかも知れません

第5話

「あれこいつて」

そこは冥王・神・魔王にあったところだった

「始めまして」

「あっはいはいじめまして

で何のようでしょうかてか誰ですか」

「わしは冥王たちの代わりに来た神じゃ」

神とかってホント威厳がなさそうな人しかいないのかな

「はあ」

「アカデミー卒業おめでとー!!」

お祝いにこれをやるっ」

「ありがとうございます」

それでこれなんですか」

くれたものは白い肩掛けバックのようなものだった

「それは4次元バックだよ」

「4次元バックですか・・・」

「そう。その中は時間が止まっているから食べ物も腐ったりしないよ

広さもほぼ無限だし・・・」

なんかすごいな

「とりたいものを思い浮かべれば手にとれているから

じゃあがんばってね」

しゃべり方がおもしろいな

おじいさんぽくなったり軽そうな感じになったり・・・

「（みんなほんとひどい・・・アカデミー卒業だけじゃなくて誕生日も

祝いたかったのに）」

以外に親バカな最高神であった

「んっゆめ？」

でもバックあるし夢じゃなかったのかな

「ルナ起きてるか」

「うんおはようフウ」

フウって朝早い・・・

何時に起きているんだろ

「お弁当本当に持っていくのか？」

「まあね朝ごはんもしっかり食べるから」

じゃないと・・・

「うむわかった」

指定された時間から2時間遅れで到着した

「ふあ〜」

あくびがでる昨日寝たの少し遅かったからな

「ルナだっけ遅くない？」

「どうせ時間どつりに来ても来ないんだし」

「まあそうだけど・・・」

それにしても荷物少くない？」

「そんなことないよ」

実際に4次元に入れてるから量的には多いしね

それから5分後

「やあ諸君おはよう！」

「「おつそーい」「」

「ユウも遅刻魔ですか？」

「はは」

なんかユウっていつも苦笑いしてるような

「じゃあ12時にセツトおk

お昼までに俺たちからスズを取れ

お昼までに取れなかったらお昼抜きだ

それにスズは3つ1人は丸太行きだぞ

それでは始め」

シュッ

「いざ尋常に勝負勝負したら勝負」

「おまえちよつとずれてるの

まずは体術を教えてやる」

「ごそごそ

「本？なんで本なんか読んでんだってばよ」

「あつ大丈夫本読んでても関係ないから」

「ボッコボコにしてやるうおおおお」

パシ

ビュン

サッ

「忍者が何度も後ろを取られんな」

「先輩それはきつすぎじゃないですか」

「ナルトー逃げなさいあんた死ぬわよ」

トラの印ついに来るかな

助けないでいろいろ言われるのもめんどくさいし助けるか

「えっ」

「このは」

もう駄目だなじゃあ行くか

「秘伝たい ドカ」

「ほら早く逃げなさいよ」

「おまえ」

「あゝもうはやくしてぶっちやけ邪魔なの」

足手まといをかばいながらって体力使うしね

「おっおっ」

「あゝひどいな痛いじゃないの」

「ウソつきですね」

全然痛そうにしてませんし

では行きますか

「本読まない方がいいですよ？」

「なぜだ」

「今から剣使うんで切っちゃってしまっても知りませんよ？」

んっよいしょ

「えっ」

そう言って私は4次元バックから大きな剣をとりだした

どのくらい大きいのかと言うと大人1人くらいの大きさはある

もちろんこれも私の手作りだ

「では行きますよ」

「えっ」

「よっほっほ」

「おつまえッちよっつとそれはなっいだろっつ」

「何ですか？はつきり言っってください」

ふふ、やっぱり強い人と遊ぶのは楽しいですね

「絶対お前楽しんでるだろ」

「そんなことありませんよ」

「ククッ」

「ユウ笑うな」

カカシって意外と感情的

でももうあきてきたなそろそろ終わりにするか・・・

シュッ

「なっ
」

「これで終わりですね」

チリーン

「何を・・・」

「別に何もしてませんよちょっと走っただけです」

「はは
」

「では先に丸太の所に行っておきますね」

シュッ

「やられたな・・・」

第6話（前書き）

今回文字数少なめです・・・

第6話

『ルナっルナもうすぐ12時じゃぞ』

『あれもうそんな時間？じゃあそろそろカカシが来るかな』

剣作っていたら時間を忘れちゃうんですよね

シュッ

「終わりました？」

「ああ」

「ふふ途中ですごい叫び声が聞こえてきたんですけど」

「気にすんな」

たぶんあれ原作と一緒に幻術でも見せられたんでしょうね

「この答えチームワークですよね」

「やっぱり知ってたか」

あれあんまりおどろいてない・・・ざんねん

「でもこのままじゃ無理ですよ？」

サスケはどげばっかと決めつけ個人プレー

サクラはどこにいるかもわからないサスケを探すサスケバカ
なるとは単細胞ですし……」

「まあそつだな」

「大変ですねがんばってください」

ジリリリリリ

「終わりましたねでは……」

「おまえら三人はアカデミーに戻る必要ないな」

「じゃあ」

「そつだルナ以外忍者やめろ」

「「「!?!?!」」」

「これはチームワークを試す試験だ」

「スズは3個しかないのになんでチームワークなのよ

仲間割れでもしろってこと」

「そつだそれが目的だからな」

「どーいしよよ」

「上忍に下忍にもなっていないやつが1人が勝てるっても？」

「それは」

「午後からもう一回やる」

だがナルトにはその弁当をやるなよやったらそいつも失格だ

じゃっ」

「そっだナルトこれあげるよ」

そう言って私はフウに作ってもらった弁当をナルトに差し出した

「でっでも」

「大丈夫その弁当って言っってたから」

カカシ先生にもらった弁当じゃなかったら大丈夫だよ」

「まあそっだけど」

「それに力不足で倒れられても面倒だしね」

「あっありがとだっばよ」

「いいえ」

ボンッ

「おまえら————

「——かく——」

「えっ？

きもっ

今までとは比べ物にならないほどの笑顔でこっちに来た

漫画とは違うね・・・

・
実物見ると今までと比べちゃうからやっぱりきもいて感じるわ・・・

「ふふユウそろそろ出てきたら？」

「やっぱりきもっていたか」

「あれじゃあきもくでしょ」

「！」「」「」

やっぱりこの3人大丈夫かな

まあカカシ先生もいるし大丈夫でしょ

「じゃあ帰るか」

「おっ」

「ちょっと解けてはよー」

まあお約束っばいナルトはほっとこ

第7話

「ねえユウ最近私がやっている任務

下忍がやる任務じゃないと思うんだけど・・・」

「まあ君がやる任務のほとんどが

AランクやSランクだからね」

「ハアちよつと休憩ってことで

ナルとたちと一緒にの任務にしてね次の任務は・・・」

「わかったよ」

そう私がやってる任務はほとんどが抜け人の暗殺や

里を滅ぼしたりなどの普通下忍がやるはずじゃない任務ばかりだった

でもなんかいやな予感が・・・

「あっ久しぶり」

「久しぶり〜」

「おはよう」

「ユウあたし嫌な予感がするんだけど気のせいかな・・・」

「どづいづい？」

「休憩にならなさそうな予感」

「俺にはわからないけど」

「それならいいんだけど・・・」

約1時間後

「おっそーい」

「ねえ毎回こんな遅れてくるの」

「そうだってばよ」

「はは（先輩ほろ できません）」

「おっ今回は一緒か？」

「ええよろしくお願いします」

「それじゃあ行くか」

「おっっ」

「だめだめそんなのノーサンキョ」

「だがナルト任務ってのは……」

「昨日はしょうゆだったから今日はみそだな」

「聞けーい」

「まあよかろうお前たちにCクラスの任務をしてもらっ」

あれこのくだりって……

「ある人物の護衛だ入ってください」

「おうこんなちびっ子だけで大丈夫かあ

特に一番小さいバカずら」

私はサクラより背が高いからこの場合はナルトをさしてるんだな

まああながち間違っではないけど……

でもこれで私の休憩するのはつぶれたな。はは……

「殺す!!」

「だめだよこれから護衛する人殺しちゃ

じゃあ忍具などを持って門に集合

散っ
」

このままさぼっちゃダメかな

まあでも白の血塊限界を見れるからいいか

てかそう思わないとやってられないって

そんなことを考えているうちに門に到着した

「それじゃあ行くつてばよ

俺つてさ里の外にでるの初めてなんだつてばよ

「ほんとに大丈夫か」

「ははまあ私たちが付いてますから」

歩き始めて5分後

「ねえカカシ先生波の国にも忍者つているんですか？」

「波の国には忍者はいない

だが大体の国には忍者がいる

その忍者たちのトップが火影様などだ」

「（あの火影様がね・・・）」

「今お前ら火影様のこと疑っただろ」

ナルト・サスケ・サクラの3人がちょっとびっくりしたような反応をした

「それにCランクだったら戦う相手はギャングなどだから大丈夫さ」

「ふうーん」

今度はタズナさんがびっくりしたような反応をした

だが今はそれよりも・・・

『まずは1人目』

「うあっ」

『ククツ次に二人目』

そう言つてタズナさんを狙ってきた

もういいか

びゅっ

『ラセンガン』

『ぐはっ』

一応手加減したよ

だって殺しちゃったら怒られる気がするしね・・・

「カカシ先生そろそろ出てきたらどうですか？」

「ありやっばきずいていたんだね」

「！！！！」

はあほかの人きずいていなかったのかよ

さんねん・・・

「ねえユウやっば勘が当たったんだけど・・・」

「はは残念だね」

「タズナさんちょっと」

「・・・・・・・・」

それから5分後タズナさんとカカシ先生は帰ってきた

「さてどうする」

「この仕事を下りられてワシが死んでも

ワシの子と孫が悲しむだけじゃ」

「は？私帰る。私は休憩のためにこの任務受けたの

い・や・だ別に知らない人が悲しんだって平気だもん」

「・・・・・・・・」

「すまん助けてくれ」

タズナさんが土下座をしてきた

「まあいいじゃないか」

「ユウ・・・」

「じゃあ続行と言つことので」

「すまん本当にありがとう」

「きついいね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6014o/>

naruto 地輪眼を持つ転生者

2010年11月12日20時50分発行